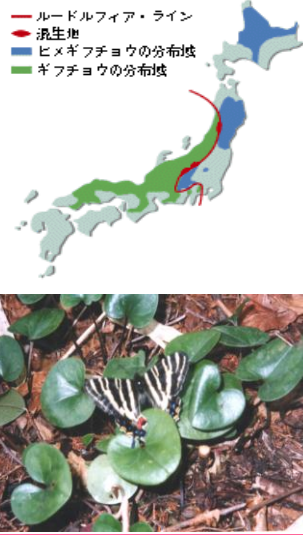


# 郡上市ギフチョウプロジェクト ～保全への第一歩～

PWAG ギフチョウ専攻班

## 1. はじめに

ルードルフィアライン（ギフチョウ線）とは、ギフチョウの仲間（ギフチョウ属）であるギフチョウとヒメギフチョウの2種類の分布域がほとんど重ならないことより、引かれていた境界線のことである。もともと、ギフチョウは郡上市においても数多く生息していたが、現在では絶滅危惧種第Ⅱ類に指定されるなど個体数の減少が広がっている。そこで、本研究において現在でも郡上市にギフチョウが生息しているのかを確認し、ギフチョウの食草である「カンアオイ」保全を努めることでギフチョウの生息環境を整え、成虫の産卵範囲の拡大、及び森林、里山の保護を検討し、活動を行った。



## 2. 活動内容

### (1) 研修

#### 1) 名和昆虫博物館研修への研修

名和昆虫博物館とは、ギフチョウを最初に発見したことで知られる名和靖氏によって1896年（明治29年）に設立された博物館である。本研究では、ギフチョウの生態の境界ラインである「ルードルフィアライン」を学ぶことを目的に実施した。



図3 名和哲夫氏に質疑応答



図4 博物館内に展示してあるカンアオイ

#### 2) 飛騨高山高校への研修

ギフチョウの繁殖ならびに生態調査研究を3年ほど実施している飛騨高山高校環境科学科ギフチョウ班に伺った。

### (2) カンアオイの植生調査

郡上市にギフチョウの食草であるカンアオイの植生調査を行った。学校周辺を調査した結果、城山の八坂神社にカンアオイが植生していることが分かった。そのカンアオイを特定して約12株を学校の憩いの森に移植し、生育調査を行った。



図5 憩いの森 (国土地理院地図 1/2500)

この場所を選んだ理由は、日陰で湿った土壌であり、カンアオイを生育するのに良い環境であると判断した。

### (3) 聞き取り調査

12月に郡上高校において実習生産物販売会が行われた。そこで私たちはギフチョウをどこで見たことがあるのかを知るために20人（男女比 男：女=6.5：3.5）のお客様にギフチョウの聞き取り調査を行った。

### (4) 標本作り

ギフチョウだけでなく、学校周辺のチョウはどのような種類のチョウが生息しているのかを調べた。その中で特に多く生息していたチョウを採取し、体長、翅長を採寸し、標本作製した。



図6 標本

## 3. 結果ならびに考察

### (1) 調査・研修

#### 1) 名和昆虫博物館研修

名和哲夫氏より、郡上市はギフチョウの分布域に入っており、実際に和良町にも生息している情報を得た。そのため郡上市八幡町にもギフチョウが生息していると考えられる。また、定期的にカンアオイの葉の裏側の卵の確認が必要であると助言頂いた。



図7 天然のギフチョウ



図8 人工のギフチョウ

### 2) 飛騨高山研修

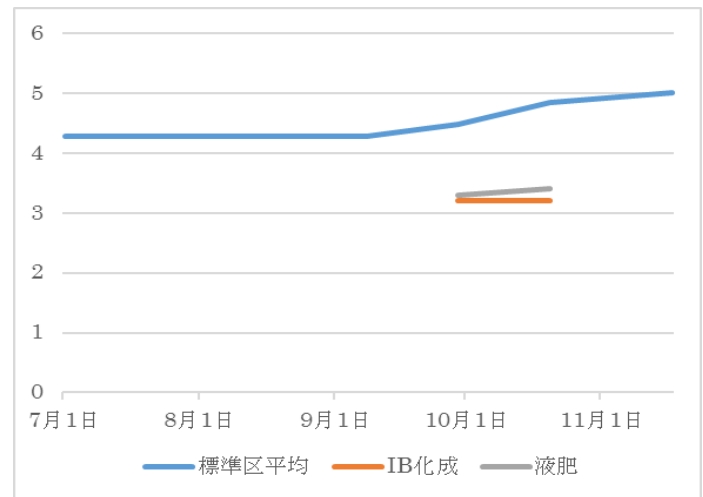
飛騨高山高校の研修で分かったことは、飛騨高山高校では約60株のヒメカンアオイを自生地から移植して育てている。カンアオイが適している場所は水分がある土壌、風通しが良い場所、日光が当たらない場所であることが分かった。

また、ギフチョウについてはギフチョウが卵を産む産卵期間は5月下旬～6月までの期間である。成虫が飛翔するのは4月～5月上旬までで、成虫の行動範囲は約3kmまでであることが分かった。ギフチョウの模様の違いにおいて、標本から分かることは、図11の天然のギフチョウに比べて図12の人工で育てたギフチョウは翅の黒い模様が太いことが分かった。

### (2) カンアオイの植生調査

植生していたカンアオイ約12株を学校の憩いの森に移植した。カンアオイの植生調査を行った結果、茎の成長は12株ともに全体的に成長し、平均約1cm伸びた。葉においては平均約3cm成長していたため、移植に成功したと考える。

一方、各種肥料を用いた試験区（IB化成区、液肥区）において、液肥区の方が標準区よりも成長度合いが低い（グラフ参照）が、台風の影響で、材料が倒伏ならびに消失してしまうなど、調査期間が少なくなってしまった。そのため、より正確な成長率を比較するため、今後とも引き続き調査をしていく必要がある。



グラフ 標準区と試験区の茎の成長の比較

### (3) 聞き取り調査

20名のお客様の聞き取り調査からギフチョウを見たことがある。と答えた方は、20人中6人いた。そのうち30代～40代で見たことがある方が多くいた。見た場所では郡上市の中では、白鳥町と八幡町、県外では関市の百年公園、岐阜市では金華山で見たことがある方がいた。その結果、岐阜県内で見られた地区を特定して郡上市でもギフチョウが見られていることが分かった。

	男性		女性		合計
	○	×	○	×	
20代	1	2	0	1	4
30代	1	2	1	0	4
40代	2	1	0	1	4
50代	0	3	0	1	4
60代以上	1	0	0	3	4
合計	5	8	1	6	20

表1 調査結果

※見たことある・○見たことがない・×



図10 聞き取り調査結果

【Windows フォトビューアー参照】

### (4) 標本作り

学校周辺に調査を行った結果、モンシロチョウ<sup>1</sup>、キチョウ<sup>2</sup>、タテハチョウ<sup>3</sup>、モンキチョウ<sup>4</sup>、シジミチョウ<sup>5</sup>の5種類のチョウが生息していることが分かった。標本にすることで学校周辺のチョウの大きさや記録を残すことができた。

種類	1	2	3	4	5
体長 (cm)	5.7	4.4	6.2	4.0	2.5
翅長 (cm)	3.0	2.4	3.5	2.1	2.3

表2 標本にしたチョウの大きさ

## 4. 結論

今回の活動から、郡上市のギフチョウの生息環境状態は幼虫の食草であるカンアオイは多く自生しており、幼虫が生息できる環境である。

しかし、ショウジョウバカマ、カタクリ、コバノミツバツツジなどの吸蜜植物が自生していないことから成虫の個体数が減少している要因であると考えられる。

よって、これからギフチョウの個体数を増やすためには、カンアオイと吸蜜植物の移植、生育方法を考慮していくとともに里山の改善、生息環境を再生して郡上市の生息環境状態を確立していく必要がある。

また、郡上地域だけでなく他の地域でギフチョウを見られた情報から場所を特定することも重要である。以上の課題から今後の活動の目標を設定し、郡上市のギフチョウを守り活動していきたい。